



第26号 2019.1.1発行  
 発行者：株式会社協進印刷  
 編集者：JO編集委員会

# 障害を「知る」の、一歩先にある 「かわり」が創るやさしい社会。

NPO法人日本補助犬情報センター専務理事兼事務局長 橋爪智子さん



京都府京都市出身。同志社大学商学部卒。  
 損害保険会社に勤務していた1997年にAAT (Animal Assisted Therapy) に出会い、余暇を利用してボランティア活動を始める。2002年身体障害者補助犬法成立の年より現職。日本フアンドレイジング協会認定の准認定ファンドレイザー・社会貢献教育ファシリテーターとして、子どもたちへの社会貢献教育も展開中。http://www.jsdtp.jp/

**江森**：視覚障害者のための盲導犬、聴覚障害者のための聴導犬、肢体不自由の人のための介助犬、この3つを総称して「補助犬」と呼び、橋爪さんはこの補助犬の理解・普及と障害者の社会参加を目的に活動をされていますね。日本ではいつ頃から補助犬が普及し始めたのでしょうか。

**橋爪**：日本にはじめて盲導犬が誕生してから70年になります。当初は道路交通法に視覚障害のある人が道路を歩く時の手段として、白杖を持つか、盲導犬を連れて歩くことが定められただけで、乗り物に乗っているとか、建物に入っているなどというアクセス権は一切認められていなかったというか、法律に明記されていなかったのです。

**江森**：なるほど、近年店舗などで、補助犬の権利について知らないばかりに、ペットと混同されて補助犬の入場が拒否されるということが起きているようですが、昔は断つ

てもよかったですね。

**橋爪**：そうですね。そこでそれではいけないということで、20年ぐらい前に介助犬が登場したのをきっかけに、介助犬、盲導犬、聴導犬の3つを「補助犬」と総称し、補助犬のための法律を作ろうと動き出しました。政治家の先生方も超党派の議連を作って動いてくださり、日本補助犬情報センターの活動が始まって4年後の2002年に「補助犬法」という法律ができました。

**江森**：補助犬自体は70年前から活躍していたけど、社会的に権利を認められたのは16年前、まあ最近といえは最近ですね。それであまり認知されていないということなんですね。

**橋爪**：法律ができた当時はメディアにも取り上げられませんでしたし、飲食店などでも大きな犬がお店に来るらしいなどと噂になっていたようですが、一時的なもので社会に浸

透するところまではいきませんでしたね。

**江森**：日本に補助犬はどのぐらいいるのでしょうか。

**橋爪**：現在1074頭です。

**江森**：それは、多い？少ない？

**橋爪**：障害者手帳をお持ちの視覚障害の方だけで約31万人といわれていますので、微増はしていますが、絶対数としては全然少ないです。

**江森**：なぜ増えないのでしょうか。

**橋爪**：補助犬の育成は第2種社会福祉事業に指定されているのですが、社会福祉事業とはいいながら、公的助成では経費をすべてカバーすることができず、その事業費の多くを寄付で賄わざるを得ないという事情があります。ロボットではありませんので、大量生産できないのは当然なのですが、10頭訓練しても、実際に補助犬として仕事が

できるのは3〜4頭という狭き門のため、資金不足ともあいまって、なかなか補助犬が増えないというのがひとつの理由です。

また障害者の高齢化ということもあります。近年では高齢になってから視覚障害になる方が多く、そういう方が盲導犬を持つのは難しいです。また今まで盲導犬を利用していただけですけど、歳をとったからもうやめるという方もかなりいます。

**江森**：確かに昔の方が街で盲導犬をよく見かけたような気がします。私が電車に乗る時間帯の問題もあるのかも知れませんが。若い方は盲導犬を持たないのですか。

**橋爪**：それも大変大きな問題です。「障害者の自立と社会参加の促進」というのが補助犬法の中にも謳われている目的なので、いま自立してバリバリ活躍されている方に持って欲しいのですが、どうも負担感の方が大きくなってしまっているようです。同

伴拒否されるし、荷物は増えるし、なんか大変そう。それなら自分一人の方が楽だと思われているのではないかと思います。

**江森**：実際には盲導犬と一緒に助けられることも多いんじゃないでしょうか。

**橋爪**：そうですね、そうです。1回でも盲導犬と生活した方は、行動範囲も広がりますし、一緒にいてくれて良かったと皆さんおっしゃいますね。

**江森**：今まで一人では行けなかったところに行ってみようという気持ちにもなるかもしれないですね。補助犬の飼育費用は誰が負担するのですか。

**橋爪**：ユーザーさんのところに来たら、それ以降はユーザーさんの負担です。年間24万円程度ですが、これを負担できるぐらいの責任能力のある方でないといけないので、そのあたりもハードルになっているかもしれません。

**江森**：補助犬の理解が広がるための何か良いアイデアはありますか。

**橋爪**：魔法の特効薬みたいなものはなかなかないですね(笑)。これまで私たちも補助犬の情報を一生懸命お伝えしてきたのですが、最近そこではないなと感じていて、時間ばかりですが、補助犬を通じた障害理解を進めていくようにしています。障害のある方がこういうことに困っていて、それはほんのちよっとしたサポートですごく助かるんだということ伝えていくことで、まずは障害者への理解を進めて、それが当たり前になれば、補助犬の理解も当たり前になるのではないかなと思って、啓発活動に力を入れています。

**江森**：ここからは、橋爪さんご自身の話を伺いたいと思いますが、この活動はいつ頃



からやっているのでしょうか。

**橋爪**：私は京都出身なのですが、京都の大学を卒業して、そのまま京都の損害保険会社に入社して、普通にOLをしていました。大手の代理店さんの担当として、毎日大きな金額の数字を扱って、とにかく一生懸命働いてました。でもあるときとうとう身体を壊してしまって、こんなことやってる場合じゃないなと思うていたときに、ニューヨークでアニマルセラピーをしている日本人女性のことをテレビで見たんなんです。元々動物好きだったこともあるのですが、なんて素晴らしい活動なんだろう！と感動してしまって、私もこれをやりたいと動物介在療法の勉強を始め、その中でのいまのNPOの理事の人たちに会ったというのがきっかけです。19年ぐらい前ですかね。

**江森**：理事の方は、どういう方たちなのですか。

**橋爪**：動物介在療法や動物と人間の関係などについて研究をされている人たちが、医師や獣医師、動物福祉などの専門家たちです。そこでお手伝いをしていううちに、実

はNPOを立ち上げるのだが事務局をやってくれ、ついでには東京に出てきてくれというので、思い切って上京して、30代目前にして初めての一人暮らしを始めたというわけです(笑)。

事務局といっても補助犬のことも障害のことも何も知らない状態でのスタートでしたから、補助犬のユーザーさんご本人に障害のある方へのサポートの仕方を教えていただきました。本当に皆さんによくしていただいて、私がいま社会に伝えたいことというのは、全部そのときにユーザーさんから教えていただいたことなんです。だから大好きなユーザーさんたちが、苦勞せずに参加できるようにしたいなという思いでやっています。

**江森**：NPOとしては現在どのような活動をされていますか。

**橋爪**：2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けての活動ですね。こんなチャンスはもう2度と巡って来ないというぐらいの気持ちでいます。これまでもいろいろな活動をしてきましたし、情報発信もしてきたのですが、これからは「かわり」を作ることが大事だと思っています。障害に関する知見というのは、知ろうと思えばインターネットなどでいつでも手に入れることができますが、「かわり」がない限りは本当の理解には至らないことを、これまでの活動で学びました。協進印刷さんにも協力いただいた「ありがとう運動」は、ユーザーさん自身が、社会の人々と積極的に「かわり」を持つとする活動ですし、若い世代向けにツイッターを使った企画をしたり、寄付付き商品を販売したりと、誰もが身構えることなく「かわり」を作ること

ができる活動を展開しています。

**江森**：飲食店による活動も始まっているようですね。

**橋爪**：恵比寿では補助犬フレンドリーなお店100店を目指そうと、ローカルメディアの恵比寿新聞さんが店舗に呼びかけて自主的な活動を展開してくださっています。またいま私たちがいる「SHAKE SHACK」さんは、お店ごとのチャリティイベントに売上の一部を寄付する取り組みをされています。みなとみらい店とテラスモール湘南店は、当NPOとのパートナーシップにより、「コンクリート」Bay side Create」の売上の5%を寄付してくださっています。



食べるだけで日本補助犬情報センターへの活動支援ができる

**江森**：障害のある方たちと接すると本当にたくさんのお気づきがあって、人生が豊かになった気分になります。障害のあるなしに関わらず、互いに助け合える社会を目指して、今後の橋爪さんのご活躍に期待しています。



SHAKE SHACK みなとみらい店  
Stand For Something Good™  
「シェイクシャック」に関わるあらゆる方々や  
企業、地域のために我々ができること  
というブランドミッションのもと、レス  
トランの枠組みに捉われないさまざまな  
活動を展開中。  
<http://www.shakeshack.jp/>

# 製紙各社今年1月1日出荷分からの印刷用紙値上げを表明

昨年11月初旬、製紙各社から相次いで2019年1月1日出荷分からの値上げが発表されました。11月1日の王子製紙の発表を皮切りに、大王製紙、日本製紙、中越パルプ工業、北越コーポレーション、三菱製紙の順に、印刷用紙について20%以上という値上げ幅も、1月1日からという実施時期もすべて横並びの内容というものです。ここには2つの問題があると考えられます。ひとつは読者の皆様すでにお気づきの通り、製紙業界の談合体質の問題です。今回のような横並びの発表は実は初めてのことでではなく、ずっと以前から半ば慣例のよ

うに行われてきています。もちろん印刷業界としては明らかに価格カルテルであるとして、公正取引委員会にも抗議してきましたが、「談合の証拠がない」として退けられました。上記6社は、この値上げ発表の直後に2019年3月期の業績見通しを発表しましたが、印刷用紙中心の日本製紙、北越三菱などは原材料の高騰などにより減益予想だった一方で、王子製紙は100億円の営業利益上方修正を発表しています。増収の要因が他の事業であるとはいえ、業績だけを見れば値上げをする必要はなさそう

ですが、業績低迷の他社を「忖度」した結果の発表と取られても仕方ありません。もうひとつの問題が、ユーザーからの過剰な品質要求です。印刷用紙はメーカー→代理店→卸商→印刷会社という経路を通じて流れてくるため、各段階でのマージンが上乗せされます。日本の紙が諸外国に比べて割高であるといわれる所以です。しかしながら、このような流通機能は、ユーザーからの「品質・価格・納期」についての厳しい要求に因應するために整備されたもので、一概に流通側を責めるわけにもいきません。また、日本の古紙利用率が約65%と欧州

諸国などに比べると低い水準にあるのも、白色度や強度などの要求品質が過剰であることが原因とされています。古くからの慣習や国民性によるところが大きいとはいえ、このような過剰な要求が印刷用紙の高騰につながっている面も否定できないと考えます。印刷用紙の製造・流通を持続可能なものとするためにも、何よりも紙のユーザーが紙のことを正しく知ること、それには印刷会社が責任をもって、お客様に紙についての正しい情報をお知らせすることが必要不可欠です。私たちの生活を彩るこの美しい印刷物が、いつまでも私たちの身近にあり続けられるように。



「オンガクに、ありがとう」番外編

## 小さいオンガクにありがとう〈中編〉

竹見正一



### 風街ろまん はっぴいえんど

最後の一人になったカウンターのおっちゃんを、柔らこう帰したおばあさんが雨戸をとり倉庫へ行った。おかんは台所へ、おとんはそろばんを弾き始める。ぼくはそうと高い椅子から降り、台布巾でカウンターを拭く。こぼれたお酒はええけど、缶詰の汁はたまらん。一回拭いただけではとれんから、何回も布巾を洗わなあかん。乾拭きまで終わったら、おとんが見に来て「よし、ええど」と言うた。ぼくはテレビへと急ぐ。夜のヒットスタジオ、はじまってるやん。「手洗いなさい」とおかんに言われ、ちゃちゃっと水に手をあててからテレビの前に座り、ちゃぶ台のお皿に盛られた渋柿を取り噛み付く。びわこのおっちゃんの渋柿、今年も美味しいな。渋柿で夏にたくさん獲ったゲンジのことを思い出す。びわこのおっちゃんの秘密の山、めちゃくちゃ獲れるんや。来年も行きたいな。あ、そういえば、あのゲンジ、タケインにも分けてやったんやっけ。ゲンジ獲りから帰ってきたとき、たまたま店に買い物にきとったから。ただ、あいつ、おとんの前で、茶色のヒラタを雄雌でほしいとかいうから、一匹しかいない茶色の雄を泣く泣くあげてしまった。はらたつわ。ほんで、絶対に卵生ませたる、とか言うてたけど、どうなったんかな。ああ、あれ以来、話をしてない気がする。運動会、おったっけ？学芸会、何役やったっけ？1年のころはけっこう遊んでたのに。そうや、1年の始め、毎日のように野球をしたある日、あいつが空き地の端っこに一人で座ってた。近づいてみたら、棒をアリの巣に突っ込んでる。おまえなにしてんねんと言うと「アリをあつめてんねん」と穴から抜き出した棒をぼくに向けてきた。「棒をな、砂糖水に一晚漬けていてん」棒にふれてしまったぼくの手に大量のアリが絡んできた。左手のグローブではたくけど、数が多すぎて間にあわない。タケインはカラカラと笑ってる。強くはたいたら、数匹漬けてしまった。「しる、なめてみ、にがいで」というので、ちょっとだけなめてみた。にがい！いやすっぱい？とにかくまずい！！そして、二人で笑いころげた。それから数日間、タケインというんなとこへ行っているんことが起こった。田んぼでカブトエビを獲ったら農家のおっさんにタバコ吸わされた。河原でイタドリを食べ過ぎておなか痛くなったときは、タケインが「これ葉草や」と言うた細長い葉っぱを食べたらほんまに治った。神社でアリジゴクをさがしたらボサボサ髪のおばちゃんに服を脱がされた。セミを給食袋いっぱい詰めて、蜂を素手で捕まえたりもした。楽しかったなあ。そうや、毎日もうええってくらい大笑してたんやけど、急にタケインが入院したんで、ぼくは野球にもどったんやっけ。そうか、タケイン引越してまうのか。

そんなことを考えていたら、おとんの声が聞こえてきた。酒が飲めるのめろー酒が飲めるぞ。テレビにあわせて歌ってる。自動車ショー歌ばかり歌ってたおとんが最近こればかりや。「さっさとたべなさい」とおかん。いつのまにか出てきたちゃぶ台のきつね丼を食べる。すごく美味しい。けどアリの味もどこかにいるような気がして残念。おっ！カサブランカダンディ。やっぱりジュリー、かつこええな！と楽しくなってきたら、おばあさんが、がちゃがちゃとNHKに変えた。しゃあないなあ、食べたら店でラジオ聴こ。薄暗い店でおとんがまだ帳面をつけている。高い椅子に座り、もう一度ラジオをつける。「はよ風呂に入りなさい！」またおかん。うん、と答えたら、何かのイントロが流れ出した。チャラらチャン、チャン、チャラらチャー、街のはずれの背のびした路次を。風をあつめて。なんやこれ、へんな曲。へん、へん、でもへんてなんやろか。

次号につづく

## 大口・七島地区社会福祉協議会

大口の魅力を紹介する「大口自慢」。今回ご紹介するのは、大口・七島地区社会福祉協議会です。

地区社会福祉協議会（地区社協）とは、住民が主体となって、地域の様々な福祉課題に向き合い「誰もが安心して暮らせる地域づくり」を進める任意の団体です。神奈川県内には地区社協が地区連合町内会を単位として21団体組織されており、区社協との連携により地域特性を活かした福祉活動を行っています。

大口・七島地区社協のユニークな取り組みのひとつに電子掲示板があります。閲覧板や紙の掲示板に加えた新しい情報伝達手段として、7年前から弊社内に設置してあり、通りに面した窓を利用して、通行中の人たちに地域の情報をお知らせしています。弊社は設置場所の提供だけでなく、掲示板コンテンツの制作にも協力しています。電子掲示板前の歩道脇にはベンチが置いてあり、お買い物途中のちょっとした休憩場所にもなっています。



他にも年間を通してさまざまな交流イベントなどを開催しています。12月には一人暮らしの高齢者を対象とした毎年恒例の「年忘れおたのしみ会」が開催されました。会長の黒川さんは「最近では、高齢者も家で何でも済ませられて外出する機会が少なくなっています。こうやって隣近所の人と顔を合わせて話す時間が本当に大切なんです」と話してくれました。地域のみなさんとの繋がりを大切に、本年も大口自慢し ていきたいと思えます！



弊社内に設置された電子掲示板

# 大口自慢

大口・七島地区社会福祉協議会

横浜市神奈川区大口仲町1の8の4

神奈川区社会福祉協議会内

電話番号：045(311)2014

## Kyoshin TODAY

### 11月ありがとうの日は「製造部からのメッセージ」

普段お客様とはなかなか顔をあわせることのない製造部ですが、顔を知っていたら、こんな人が働いているんだと安心や親しみをもっていただければ…という思いから、昨年11月のありがとうの日に、制作・印刷を担当した社員の顔写真と感謝の言葉を添えたメッセージカードを企画しました。

また、一方通行で終わらないように、カードの台紙をハガキサイズの顧客満足度アンケート用紙にして、返信していただけるようにし、実施期間中に納品する商品に同梱または手渡しでお渡ししました。

12月末時点で、25件配布し12件の返信をいただきました。お客様のお声に応えた、より良いサービスの提供を目指します！



### 「洋光台クラフトマルシェ」に出展

昨年11月24日(土)・25日(日)に、団地のマルシェ「洋光台クラフトマルシェ」に出展しました。このマルシェは、40年以上の歴史を持つ磯子区洋光台団地の洋光台中央広場リニューアルを記念した催し。広場リニューアルはUR都市機構の「団地の未来プロジェクト」の一環で、プロジェクトディレクターに佐藤可士和氏、デザイン監修に隈研吾氏という超豪華な顔ぶれによ



## ブログもチェック！ <https://kyoshin-blog.com/>

るプロジェクトの最初のモデルケースです。

当社からは、「That Day 366 あなたのなかのかけがえのない1日」ポストカードと「2019年百人一首カレンダー」を販売しました。

当日は陶芸、服飾、雑貨など様々なジャンルのクリエイター約80ブースが出展し、真冬並みの寒さにもかかわらず、大いに賑わっていました。

ポストカードは、当社窓口にて1枚100円(税込)でお買い求めいただけます。



インターンOBが手伝ってくれました

### 「ありがとうナイト2018」開催御礼

昨年11月16日(金)、5回目のCSR報告会「ありがとうナイト2018」を開催いたしました。過去最高97名のたくさんの方にご来場いただき、心より御礼申し上げます。

今後もステークホルダーの皆さまから信頼していただける企業であり続けられるよう努力してまいります。引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



JO(ジェイ・オー)2019年1月号(第26号)

発行者：株式会社協進印刷

横浜市神奈川区大口仲町108番地

TEL:045(431)6611

FAX:0450(3730)6273

URL: <http://www.kyoshin-pint.co.jp>

